

## 閉会の挨拶



### 羽後静子 HANOCHI Seiko

中部大学国際関係学部国際学科教授・中部大学国際人間学研究所副所長  
カナダ・ヨーク大学大学政治学 Ph.D.コース終了 ISA(国際関係論学会)・平和学会・人間の安全保障学会・コミュニティ政策学会。中部ESD拠点協議会基盤部門副代表。専門分野は国際政治学、研究テーマはESD/SDGs、人間の安全保障(難民・移住者・ジェンダー・LGBT)。

皆様、今日は非常に微妙な時期にお越しいただき、本当に感謝しています。内容も大変盛り上がりました。まずは、マレーシアのご報告と内モンゴルのご報告に対して、心より感謝申し上げます。

副田先生の報告に関しては、私も二度ほどペナンへ伺いましたが、非常に観光客が多い中、私たちは外国人が描いた絵画の写真を一生懸命撮っていたわけですね。植民地主義の歴史も含めて、外から持ってきたいわゆる西欧の文化から自分たちの伝統や文化をどう守り、内からの発信にしていくかという問題提起、外発的ではなく内発的な発展をめざすことは、われわれアジアの諸国民に非常に共通するものがあると思いました。

ディアナさんの報告では、自分たちはグリーンツーリズムに取り組みたいのに前例がない、一体どこをモデルにしたらいいのか、その教育のテキストはどうしたらいいのかと、非常に苦悩され、模索しておられました。これもまた私たちに通ずるところでして、何が持続可能な観光でありグリーンツーリズムであるのかということを中心に考えながらやっておりますので、やはり共通点があるなと思いました。

フムチル先生の内モンゴルの報告は、まさに私たちの近代の超克の問題と重なる考え方でした。内モンゴル東部の一部は、日本の傀儡政権のいわゆる満州国でしたから日本人の加害的責任も歴史的にはあるわけですが、同じアジアとして、これから未来に向けては、互いに共通する持続可能な観光の研究や戦略が立てられるべきではないかと思いました。

例えば、ペナンの世界遺産というお話がありましたが、私が最近読んでいる『ベルク「風土学」とは何か』という本では、日本の持つ自然とのつき合い方、風土という考え方をベルクが西欧に持って帰り、またそれを西欧から世界に発信しています。西欧人は環境を対象として客観的に見て、自分と他者との関係でつき合っているけれども、日本人はそうではないということを彼は発信し続けています。

その1つの事例が、この本の共著者であり静岡県知事で経済史が専門の川勝平太先生が書いている富士山の世界遺産登録に向けた最終審査委員会にオブザーバー参加した時のエピソードです。富士山が最終審査で議論しているとき日本政府(文化庁)は、国連ユネスコの審査委員長から、日本政府の申請にある「富士山」だけでは世界遺産にならない、「富士山」ぐらいの高さの山は世界中にある、なぜ「富士山」なのかをちゃんと伝えないといけないと言われ、世界遺産に選ばれる理由として「富士山」が日本人にとって、宗教の源流であったり、魂の源であったり、精神の統合であるということを伝えなければならないということで正式の名称を「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」とするように提案されたという。そのおかげで、世界各地の審査委員から賛成

の意見が相次ぎ、この長い名前の正式名で世界遺産になったそうです。これからの世界の環境問題や自然とのつき合い方においては、やはり日本人の持つ自然との共生、あるいは「風土」という考え方が大事なのだと書いておられます。私は、「富士山」をどう認識し、どう表現するかが私たちのやろうとしている「持続可能な観光」の中身なのではないかと思いました。本日、宗宮先生も柳谷先生も、そしてマレーシアと内モンゴルのご報告でも、西欧でないアジア地域の私たちが、本来持っている自然とのつき合い方ということをお示しになりました。

それをこれから世界にアピールしていくという意味で、このプロジェクトは非常に重要なメッセージを発信する可能性を持っていると思います。これでようやく1年目が終わり、今日いろいろと試行錯誤をしながら進めていらっしゃる皆さん方のすばらしい取り組みについて伺いましたが、これらの七つのプロジェクトも、まさに底辺、源流においてつながっているわけです。

宗宮先生、柳谷先生が最初に中部地域の ESD 拠点を伊勢・三河湾流域圏と呼んでいるということをおっしゃっていただきましたが、春日井市は庄内川の中流域にあります。昨日土岐市と中部大学との連携協定が結ばれたと箕島課長からご報告がありましたが、恵那から瑞浪、土岐、多治見、春日井、名古屋と5都市を流れて伊勢三河湾に注ぐ庄内川を一つのモデルとして考えることができます。愛知・三重・岐阜を含む中部地域は、12の一級河川のもとで発展してきました。もちろん世界中見渡しても、川の周辺に人間が住み始めた文明の歴史もありますが、中部地域は、12の川が点を線にし、一つの面として発展してきたと言えます。上流は自然豊かであり、豊田は産業化・工業化が進んでおりまして、世界でも非常に特殊な地域です。

そういったことからこの地域は、早い時期に世界に174ある ESD の拠点の一つに認定され、中部大学が幹事校として事務局も担っております。この中部 ESD 拠点では、世界的にはまだ広がっていないバイオリージョン、生命流域圏という考え方をユネスコを通じて国連に提唱しています。今日は川村先生もおられますが、こういう生命流域圏という「風土」的な考え方は、実は世界にあまりないのですね。そういった点からも私たちの持つポテンシャルの大きさを再確認しつつ、皆さん、さらに2年目、一緒に楽しくこのプロジェクトを進めていきましょう。

以上を最後のご挨拶にかえたいと思います。今日は、長時間おつき合いいただき、本当にありがとうございました。新年度もまたよろしく願いいたします。（拍手）